

ある少女の満洲生活

——細谷和子氏史料紹介——

大石茜



図1 寄贈史料

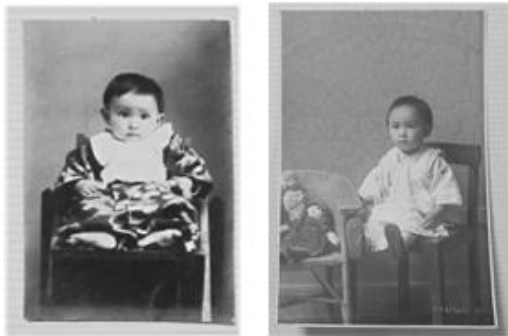


図2 幼き頃の和子

はじめに

細谷和子氏（以下、敬称略）と初めてお会いしたのは、2017年10月に上野で開催された公主嶺会だった。自宅に、満洲関係の写真や史料がたくさんあるので、引き取ってもらえないか、と声をかけて

くださった。12月に初めてご自宅をお訪ねし、その後何でも通わせていただき、史料を拝見したり、体験をお聞きしてきた。

細谷（旧姓：吉富）和子は、小学校5年生から女学校卒業までの時期を満洲の公主嶺で過ごしている。父の転任により終戦前に内地へ戻ったこと、また、東京の家が偶然にも空襲を免れたことにより、非常に多くの写真や史料が手元に残っている。その多くを、本研究会に寄贈してくださった。本稿では、和子の生い立ちをたどりながら、和子が大切にしてきた貴重な史料の一部を紹介していく。

1. 吉富一家

1926年12月25日、大正天皇の崩御により元号が昭和となったその日、和子は東京で生まれた。父・吉富敏男は軍人（陸軍）で、母・季子（すえこ）の家系も軍人が多いという一家の長女（4人兄弟の一番上）であった。父方の祖父母である吉富林作・たみは長州の出身で、祖父はもともと武士であったが、屯田兵となり北

海道の滝川へ渡り、兵村監視の仕事をしていた。父・敏男はそこで長男として生まれた。入拓した土地は、原生林のような場所で、子どもに教育の機会を与えることが難しかったという。10人の子どもたちの教育の機会を求め、祖父母は開墾した土地を手放し、札幌へ移った。敏男は札幌中学校を卒業し、陸軍士官学校に入学（29期生）し、工兵となった。

母方の親族も多くが陸軍である。祖父・大久保徳明は、土佐の出身で、『坂の上の雲』でも知られる秋山好古と陸軍の同期であり、また、新田次郎『劔岳-点の記』に登場する参謀本部測量部長のモデルが、祖父であるという。要塞司令官として旅順にいたこともあった。祖母・仙は篤志看護婦をしていたという。母方の祖母は千駄ヶ谷で暮らしており、700坪あるお屋敷だった（祖父は母が幼い頃に亡くなっている）。母も10人兄弟で、下から2番目であった。父母は、母方の叔母の紹介で結婚することとなった。軍人の一家に生まれた母は、和子の嫁入り道具はまず喪服、と言っていたという。当時、軍人の家へ嫁いだ場合、夫は戦死する可能性が高い。軍人との結婚は、そのような覚悟をもって嫁ぐことを意味していた。

和子が生まれた頃、父は転任で熊本に単身赴任していた。和子も、父の転勤で熊本や大分で幼少期を過ごし、学齢に達する頃には東京へ戻り、千駄ヶ谷第一小学校に入学した。この頃父は、市ヶ谷にあった陸軍士官学校本科の工兵術科教官

であり、士官学校48期から50期あたりの工兵将校が教え子であった。

和子は、父からは「平常心」を教わり、母からは、「約束を守ること」を教わったと語っている。宿題は先生との約束だから必ずやるようにと、母から言われていたという。



図3 小学校時代の葉書

2. 満洲公主嶺へ

1937年に父の転任により一家で渡満し、公主嶺小学校5年生に転入した（31回生）。担任は着任したばかりの岩森亘先生だった。岩森先生は奈良県吉野郡の出身で、お国自慢をよくしていたという。

渡満したこの頃、はじめて月極の2円のお小遣いをもらうようになり、内地の友人たちに送る便箋や絵葉書を買ったという。幼少期からの葉書や手紙を、和子は大切に保管している。図3は、公主嶺小学校の同級生で、和子と同じく陸軍官舎に住んでいた友人が、熊本へ引っ越したのち、和子に宛てた葉書である。



図4 譜面

当時、音楽の授業で生徒たちは作曲をしていた(図4)。和子が5年生のときに書いた譜面が残されている。4章節分の譜面を書く宿題であったが、16章節書き、先生に褒められたという。タイトルは「皇軍」で、1番が陸軍、2番が海軍の歌詞となっている。

「笠置山行在所」と書かれた習字の作品もある(図5)。「高野山佛法僧」や「太平洋土用波」も書いたという。当時のすずりも、今でも大切に保管されている。図6は5年生の家事科の授業で作成したフランス刺繍の花瓶敷きである。

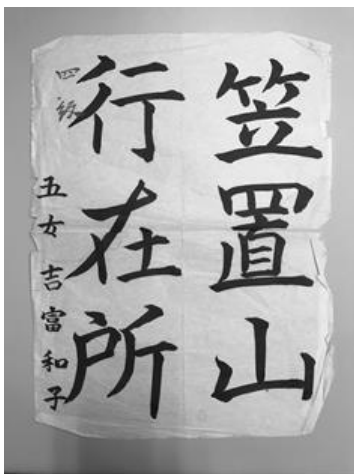


図5 小学校時代の習字

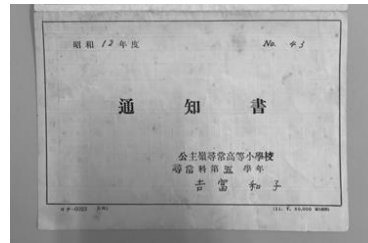


図7 公主嶺小学校通知書



図6 小学校時代の刺繍

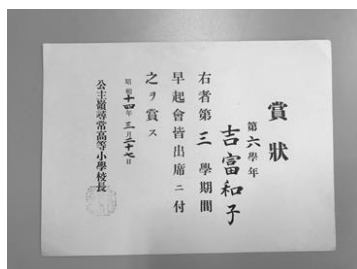
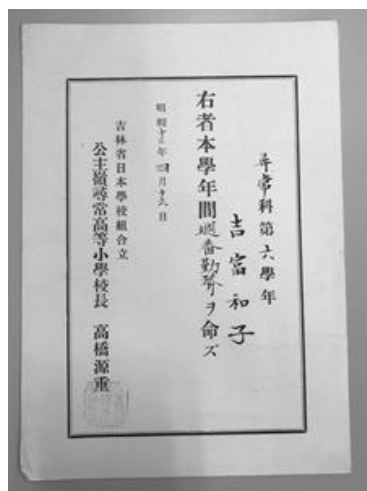


図8 週番・早起会

公主嶺小学校の通知書には、成績や出席状況、身長体重等が記されている（図7）。体操の授業が苦手だったという和子の当時の様子がよくわかる。

週番の任命書や、早起会の皆出席の賞状も残されており、当時の学校の取り組みが垣間見える（図8）。週番の仕事は、他の生徒よりも早く学校へ行き、掃除をしたり、窓が割れていないか等の確認をすることだった。早起会は、夏休みの取り組みで、早起きをして学校へ行き、ラジオ体操をして麦茶を飲んで帰ったという。当時のラジオ体操は、現代のラジオ体操と歌が異なっていた。

小学校5年生の修学旅行で奉天・撫順（2泊3日）を、小学校6年生のとき大連・旅順（3泊4日）を訪れており、その際のスタンプ帳が残されている（図9）。修学旅行中、5年生では小遣いが3円、6年生では5円であった。6年生の修学旅行の際のお土産である壁掛けを、大切に保管してきた。旅順の白玉山にある忠霊塔が描かれている。

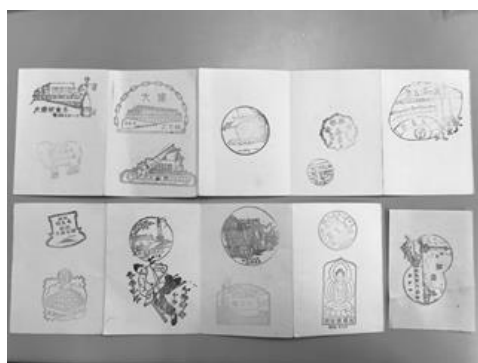


図9 修学旅行

1939年3月、公主嶺小学校を卒業した。和子が小学校で作った短歌を、手芸好き

の母がリボンにペインテックスで書き写し、仲の良かった友人たちに記念として配った。リボンには、「巣立つとも 永久に忘れじ学び舎の やさし師の君 ひなどりの友 和子」と記されている(図10)。



図10 小学校卒業証書とリボ

3. 新京錦ヶ丘高等女学校へ進学

1939年4月、新京錦ヶ丘高等女学校(5回生)に入学した。公主嶺には中学校や女学校がなく、進学する生徒たちは新京の学校を受験することが多かった。公主嶺から新京の女学校に通うためには、新京に保証人が必要だった。新京に住んでいた母方のいとこの一家(叔父・石川義久は軍人)に保証人を頼むこととなった。このいとこである石川忠久は、のちに漢文学者となり、令和改元の際に、新元号の考案を担当した1人である。



図11 女学校入学関連史料



図12 女学校時代の写真・紀章



図13 身分証・定期・授業料納付書

女学校の入学許可証や、合格者一覧を大切に保管していた。新聞記事「新京中等校合格者」には、新京中学校（新京一中）、新京商業高校、新京敷島高等女学校、新京錦ヶ丘高等女学校の合格者が掲載されている。自身の名前と友人の名前に印が付いている（図11）。

制服のリボンはいんじ色だった。記章も大切に保管されている。当時、女学校の会議室には、図12の写真のような全生徒の個人写真が常時展示したったという。生徒の髪型は自由ではなく、3つ編みをしていた転校生が、翌日にはおかつぱになったという。先輩後輩の上下関係が強く、上級生になると、前髪を分けることができたという。

女学校在籍の身分証明書や定期券、また、授業料の納付書も残されている（図

13）。毎月、授業料 500 円、校友会費（同窓会費）100 円、旅行積立金 200 円、家事費 20 円、計 820 円を納めていた。4 月と 9 月には保護者会費 150 円が加算されている。

女学校時代の家事科のノート 4 冊が残されており、大変貴重な史料となっている（図14）。ノートには、調理実習の記録や、栄養に関する板書などが丁寧に記されている。

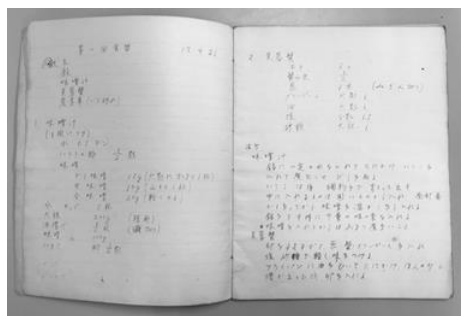
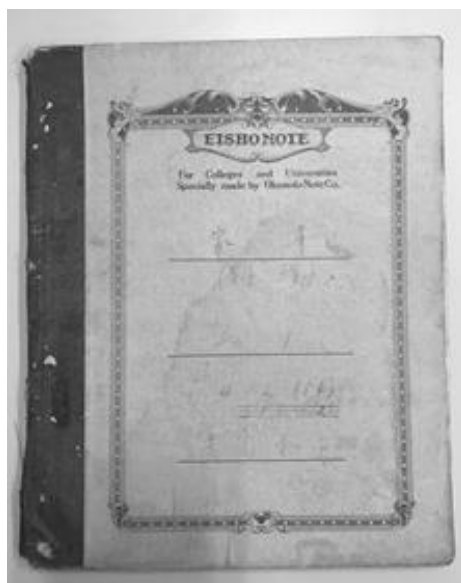


図14 女学校ノート

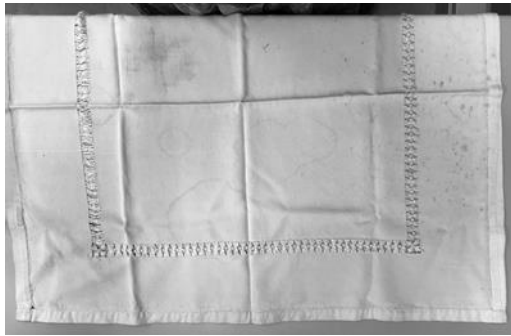


図15 家事科作品

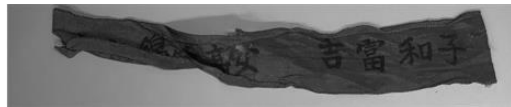


図16 修学旅行リボン

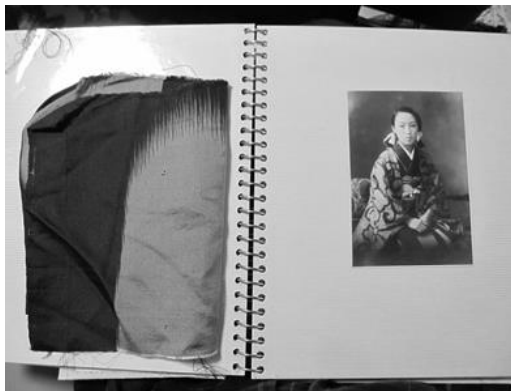


図17 着物と写真

女学校には割烹室があり、6人1グループで調理実習をしていた。割烹室の隣が試食室で、女学生たちの作った料理を先生たちにもふるまった。また、洋裁も和裁も女学校で習ったという。家事科の授業で作成したテーブルセンターも残されている(図15)。ドロンワークの作品である。

修学旅行で内地へ18日間行き、全国の神社仏閣を訪れる「聖地参拝」をした。その際に祖母や叔父叔母にも会いに行った。修学旅行中に山本五十六元帥の国葬があり、国葬の時刻に皆で黙祷をした。修学旅行でリュックに付けたというリボンが残されている。リボンには父による手書きで「錦ヶ丘高女 吉富和子」と記されている(図16)。

母が新しい着物を和子に仕立てるたびに、それを着て公主嶺のさくら写真館で写真を撮っていた。和子は、写真で着ている着物の布地をアルバムと一緒に収めて保管していた(図17)。白黒写真ではよくわからない着物の色や柄がよくわかる。母はよく土井呉服店へ買い物に行っていたという。

女学校2年生のとき、微熱が続くことがあり1年間休学することとなった。当時、結核を心配し、和子のように休学することは珍しくなかったようである。この頃、父親が牡丹江省興源鎮に単身赴任していた。単身赴任先から父親が和子に宛てた手紙が残っている(図18)。和子が学校の成績を報告した手紙に対する返事

のようで、成績が上がったことへのコメントや、家族の様子をうかがう内容が記されている。

また当時の手紙や葉書の中には、検閲済みのものも多く見られる。図19は、東京の友人から公主嶺の和子宛の手紙である。封筒の底が検閲で開封されており、検閲済みのシールが貼られている。

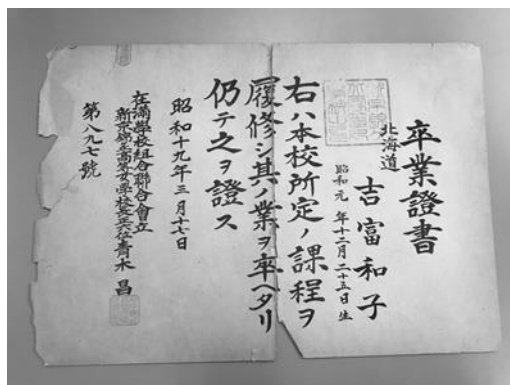


図20 女学校卒業証書

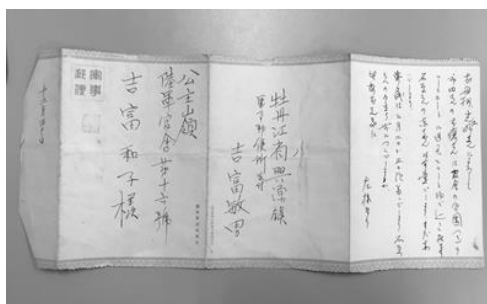


図18 父からの手紙



図19 検閲済みの手紙



図21 中原淳一の絵葉書1



図22 中原淳一の絵葉書2

1944年3月、和子は女学校を卒業した(図20)。卒業式では、「仰げば尊し」が禁止されており、代わりに「海ゆかば」

を歌ったという。

卒業後、新京に働きに行く友人も多かったが、体が弱いため電車通勤は避け、家の近所で仕事を探した。当時、幼稚園では、免許がなくても手伝いに働きに行くことができたので、公主嶺幼稚園で働くことを考えていた。ちょうどその頃、父の南方への転任が決まり、内地へ戻ることとなった。

内地へ戻った和子と満洲に残っていた友人との手紙や葉書が残されている。当時満洲でも流行っていたという中原淳一の絵葉書もみられる。図 21 は、公主嶺小学校の同級生から別府の和子に宛てた葉書であり、図 22 は、別府に移った和子が、新京の友人に宛てた葉書（転居先不明で未達）である。和子は月刊の雑誌をとっており、はじめは『少女クラブ』を愛読していたが、途中から『少女の友』を購読するようになったという。当時の少女文化を享受していた様子がうかがえる。

4. 内地・大分へ

1944 年、父が南方戦線へ転任となり、陸軍官舎から出なければならず内地へ戻った。転任の指令を受けて 1 週間で引越さなければならず、引越しの荷造りは大変だったという。荷造りには、柳行李や竹行李のほか、木製のみかん箱やりんご箱を使用した。父が長男であるため、長男の妻が舅・姑と一緒に暮らすべきだということで、父方の祖父母が暮らしていた大分県別府へ引越した。当時祖父

母は、北海道から、10 人の息子たちの暮らす場所を転々と移り住むような生活をしてきた。別府に移ってからの生活は厳しく、母の服や指輪等を売って生活していた。和子は別府で小学校の代用教員をしたが、戦後男性たちが復員し必要なくなった。当時さまざまな物資が不足しており、ノートもなかったため、酒屋で一升瓶に貼る紙をもらいノートの代わりに使用していたという。代用教員を辞めたのち、幼稚園の先生が病気だということで、代用保姆となった。その後、職を求めて 1 人で上京し、日本商工会議所の庶務部で働くこととなった。その後転職し大和証券に勤め、以来今日まで東京で暮らすこととなった。任命書によれば、月俸は、1945 年 6 月付けの代用教員及び、1946 年 1 月付けの代用保姆が 30 円、1948 年 12 月付けの商工会議所庶務部では 3710 円とある（図 23）。戦後のインフレの影響がよくわかる。



図 23 任命書・辞令

父は敗戦時には大佐であり、少将になることが内定していた身分であった。戦後は捕虜となり、インドネシアのレンバン島にいた。食事は 1 日 1 缶で、それ以

外は自給自足だったという。海水を沸騰させて飲んだり、猿を獲ったり、タピオカを食べていたという。父は、食事が出された缶の蓋を切り取り、俳句を彫って持って帰ってきた(図24)。同じ部隊に東京美術学校(現・東京芸術大学)から召集された人がおり、父と同様に缶に絵を彫っていた。非常に立派な絵であったという。



図24 父の作品

父の兄弟の末っ子である吉富忠雄(陸士59期)が当時名古屋の復員業務にあたっており、父が生きており内地へ向かっているという情報を得られた。いつ父が別府に到着するかわからず、和子と妹は、毎日駅へ父を迎えに行った。駅に現れた父は、それまでの恰幅の良い体型からは想像ができないほどやせ細り、杖にすがって歩いており、和子たちはとても驚いたという。ちょうどキャベツの収穫の時期で、キャベツがおいしいおいしいと食

べていた姿が今も印象に残っているという。

5. 同窓会史料

満洲で過ごした時期の史料のほか、戦後の同窓会関係の史料も数多く残されている。和子自身が直接関わっていた公主嶺会や、公主嶺小学校同窓会関連のものだけでなく、和子の家族・親族が関わっていた陸軍・海軍関連の同窓会史料が含まれている。中でも貴重なものとして、公主嶺小学校同窓会が出版した記念誌『満洲公主嶺——過ぎし40年の記録』(1987年)や写真集『満洲公主嶺——その過去と現在』(1988年)の制作過程を知ることのできる手紙や葉書、手書きの原稿がある。

図25は、和子が寄稿した原稿の原本である。掲載にあたり編集者から修正を依頼した原稿も多かったというが、和子の原稿は字数も守られており、文章も読みやすく、そのまま掲載されていたことがわかる。

記念誌や写真集の編集を手掛けた伊藤聖(33回生)及び土屋洸子(37回生)からの手紙や葉書も残されている(図26・27)。当時の陸軍官舎について、伊藤から問い合わせている手紙や、同窓生の近況について土屋からの報告などが確認できる。今日手に取ることのできる様々な同窓会の史料とは、こうした個人が保管してきた史料や、記憶を頼りに編纂されてきたということがよくわかる。



図 25 記念誌原稿

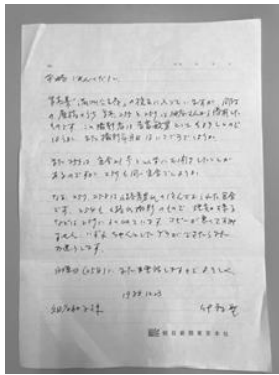


図 26 伊藤聖からの手紙

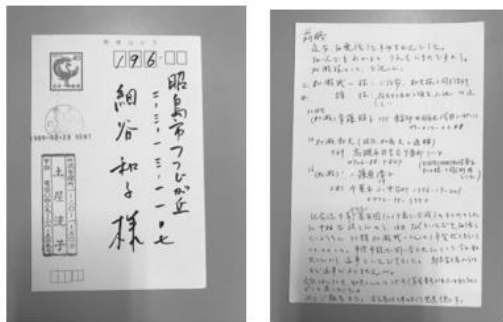


図 27 土屋洗子からの葉書

おわりに

細谷和子史料は、幼少期からの膨大な史料群である。渡満した少女の日常生活や、軍人の父を持つ家庭の暮らしぶりを垣間見ることのできる貴重なものとなっている。このように散逸することなく、まとまった史料が自宅に保管されていることは、珍しいと言えよう。また、戦後の史料は、同窓会の出版物が、どのように個人の史料や記憶を頼りに編纂されてきたかを知ることのできる貴重なものとなっている。本研究会では、これらの史料を大切に保管するとともに、さらなる研究へと活用していく予定である。